

Title	続・現代言葉遣い小考：国語を考える者の自戒のために
Author(s)	後藤，秋正
Citation	札幌国語研究，2：41-56
Issue Date	1997
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2604
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

続・現代言葉遣い小考

— 国語を教える者の自戒のために —

後 藤 秋 正

本誌の創刊号に、「現代言葉遣い小考」を載せてもらった。

その後、「いかにも後藤節」とか、いくつかの反響があつて、少々気を良くしつつも、いっぽうではびくびくしている。あれで終わりにしようと思つたが、まだまだ気になる言葉遣いが見受けられる。よつて、本号にも、その続編を載せてもらうことにした。忌憚のない御批判を切に願う。

① 福原啓郎 『西晋の武帝 司馬炎』(白帝社、一九九五・四)

● 三二九頁、あとがき「なお、私事にわたり恐縮であります。病気で寝たきりになつても、かたわらにあつて小著の執筆を見守り、執筆の合い間にその名を呼ぶと、黒い尻尾を振つて答えていたが、原稿が完成し、宅急便で送つたその日の夜半に逝つた愛猫フランチに、已むに已まれぬ思いから、捧げた。」

まず、「答えていた」は、「応えていた」が正解。小生愛用の『辞林21』(三省堂、一九九三・七)には、「こた・える」【答

える】

① 呼びかけに対し返事をする。② 質問や問題に対して、説明したり回答したりする。「こた・える」【応える】① 相手の期待・要望に応じる。報いる。② 刺激や衝撃などを強く感じる。とある。猫がことばで答えたわけではないのだから、「応える」だろう。この混同はしばしば見られる(「東方」一八四、一九九六・七所載のKY氏の「時代を反映した経済地理学」という書評にも、「現実の課題に答えて欲しい。」とある)。また、最後の「捧げたい」は、目的語がない。一度「小著」と出てゐるから省いたのかもしれないが、落ちつかない。この文章を初めて見たときは、執筆に励む夫の傍らに病妻が臥せつてゐる感動的な光景を想像したのだが。なあんだ、結局、この本は猫に捧げられたものだったのか。

② 佐藤保 『漢詩のイメージ』(大修館書店、一九九三・三)

● 九頁「殷王朝はこのような連合国家の盟主として諸部族を統合し支配していくためには、諸部族のあがめる神々を統一す

るより崇高な神をいただいで王朝支配者の優位性を示さなければならなかった。」

「より」の前に、「」が必要だろう。統一するより、勝手にさせておくのが良いと判断した、と続くのかと考えてしまった。この本、仕事上の必要と著者の高名を聞き知っていたので東京・神田の東方書店で購入した(九六・三・二六)もの。ここで取り上げた本をすべてくだらないと思っっているわけではないことを、敢えて断っておく。

●一七八頁「湘水の流れは時には三湘とも呼ばれ、……さらに衡陽県で蒸水と合して蒸湘といわれる……。」

「衡陽県」という地名はないから、衡陽が正解。しかも、一九四九年には早々と市になっているのだから、著者はいつの資料を見たのだろう。再版なのに直っていない。

●一八四頁「(北宋の、「岳陽樓の記」を書いた)范仲淹自身もまた左遷されて岳州に来ていたのである。」

慶暦六年(一〇四六)、岳州(湖南省岳陽市)に左遷されていたのは滕宗諒(字は子京)であり、滕子京に「岳陽樓の記」の執筆を依頼された范仲淹は、鄧州(河南省鄧県)にいた。岳陽で「岳陽樓の記」を執筆したのではない。詩語を考える上で大変に参考になる書物なのに、このような基本的なミスがあるのは困ります。

③札幌大学YK氏「学ぶことの法則―大学に入った君に―」(「毎日新聞」夕刊文化欄、九六・四・二)

●「基礎はすべからく重要だ。」「強制されたものは、最初は、

すべからく、面白くない。」

前回も述べた、「すべからく」が「べし」と対応していない例。御丁寧にも二つも出ている。しかも後者は、「すべからく」の前後に読点まで付して。大学に入ったら、こういう文章は間違いなのだとすべからく知るべし。もつとも知らないのはこのような教師だけで、高校生でも知っているか?!この筆者は、「大学教授になる法」だかなんだか、やたら書きまくっているが、新聞も校閲部があるのなら、こういう文章はすべからく載せるべきではない。

④小林惣太郎「白酒から啤酒へ―中国ビール最新事情―」(「毎日新聞」夕刊文化欄、一九九六・四・二)

●「中国の殷時代の出土された青銅器は酒を入れる器か、飲む器が多い。殷時代の人は酒を良く飲んでいたといわれる由縁である。」

冒頭部分を引用した。「殷時代の」の「の」も変だが、まず、「出土された」がおかしい。「出土した」でしょう。気になっ
て「出土」を『大漢和』で引いたら見当らず、『漢語大詞典』(上海・漢語大詞典出版社)には、「謂古器物從地下被發掘出來(古代の器物が地下から発掘される)。」とあり、清・葉廷琯の『吹岡録』なる書物から、「此石不知何時出土。」という例ともう一例を挙げていた。言葉としてはそんなに古いものではないらしい。次に、「由縁」は、「事の由来。ゆかり。」(『辞林21』)の意であって、ここでは「所以」が正しい。この人(東和経済総合研究所室長だそうだ)の文章は、あちこち首を傾げた

くなる箇所がある。「青銅器の器」は、「馬から落ちて落馬した」式の文章だし、「中国の酒は、黄酒（老酒）の醸造酒が昔からの主流で、唐や元時代に開発され改良されたコウリヤンを原料とする白酒が後発である。」となるとただの無知ではすまなくなる。前半は、小生なら少なくとも「中国の酒は、醸造酒である黄酒が昔からの主流で、」とするであろうし、後半部分、「唐や元時代」と大雑把なことを言われると、その間に挟まれて三百年以上も続いた北宋・南宋はどうなってしまうのかと聞きたくなる。ちなみに、白酒（蒸留酒）が造られたのは元代であるとするのが定説なのだ。ほかにもあるが、事実誤認の例を一つ。「中国の民族ビールが生まれたのは一九一五年の北京双合盛ビール（五星ビール）工場……」とあるのは、「一九〇四年の黒竜江省一面坡で経営された中東ビール公司」が正しい（『中華酒典』黒竜江人民出版社、一九九〇による）。わが敬愛する黒竜江省の師友たちの名譽のために敢えてつけ加えておく。

⑥谷崎光『中国てなもんや商社』（文芸春秋、一九九六・二）

●一三六頁「私は川を下る筏に乗って売られたりなんかしていないのだ。日本女性はすべからく、おしんと思われるのだからか。」

天津で泊まったホテルのフロントの女性に、貿易商社の日本人OLが「阿信（おしん）」と言われたのだ。例によって「すべからく」の用法が間違っているが、この本はそんなことは無視できるほど、無茶苦茶に面白い。巷に溢れている半可通

のアメリカ的（少々古くて下品になった）な中国紀行やら中国ガイドよりもはるかに中国が理解できること請け合いです。内容は読んでいただくとして、帯のキャッチコピーを紹介しておこう。「大阪の貿易商社に勤務するOLが体験したウソのようなホントの話。等身大の中国の現在を描く爆笑ノンフィクション！」さらに太字で「OL、中国とバトルする！」とある。この本を読むと、スーパーなどで売っている中国製の安価な衣料品も、涙なしでは買えなくなるかも!?

⑦青山宏校閲・中国学術研究会『孟浩然詩索引』（汲古書院、一九八一・七）

●後記「嘗って『広韻声系』の検字表を修訂活字化した昭和五十二年度……」

このごろ、テレビやラジオで、「かつて」を「かつて」と言う人間が増えたことを嘆いていた（前号の「蛇足」に書いた）が、音声はすぐ消えてしまうので、いつ、だれが、どこで言ったかということなかなか記録にとどめられないでいた。たまたま見つけたのがこの例。「嘗て」であろうが「曾て」であろうが、決して「かつて」ではないのだ。ところで九六年六月九日、夕刻六時過ぎのNHKテレビ「北海道中膝栗毛」石狩町篇では、若い男性アナウンサーが、しっかりと「かつて」と言っていた。まだまだ捨てたものではない。

その後、西岡弘「殯宮と挽歌と」（『中国古典の民俗と文学』角川書店、一九八六、九三頁）にも、「かつて折口先生が……」とあるのを見つけた。氏の『中国古代の葬礼と文学』等から

は多大の学恩を蒙っているのだが。御免なさい。

⑧あいの里四条三丁目T町内会長「新連合町内会に期待する」

(広報「しのろ」第四〇号、篠路地区連合町内会、一九九六・

一)

●(除雪は)パートナードリッパを組み合わせてすることにより、町内の道路、歩道が早く解けて雪からの悩みを解決されました。」

広報シリーズ第二弾。道路と歩道を区別するのも分からないが、ましてや、道路や歩道が解けるわけのものではなし。さらに「解決されました」の主語はなんなのだ。この広報には、H市議会議員の「年頭所感」もあり、その中には、「(篠路は)肥沃な土地が中心部に多く札幌市民の食料供給の生産基地として、つい最近まで農地を手放すことはできない相談であった事は、かつて私も農業出身者として理解する事は出来ました。しかし、いよいよ札幌市の事業として将来北区から分区にむけて悔いがない街づくりが重要であります。」などという奇っ怪な文章もある。「農業出身者」という言葉も聞き慣れないが(サラリーマンが会社を定年になったら商業出身者で、小生が停年になったら、教員出身者とも言われるのだろうか?)、かつては理解することができたと言うのだから、今はどうなのかと続くのだろうと思ったら肩透かしを喰ってしまった。すべてとは言わないが、この程度の文章しか書けない議員は、きつと議会でも一回も質問しないで居眠りばかりしているのだろうか。

⑨「燕京学報 第一期 一九九五年」(『東方』一八二号、東方書店、一九九六・五・五)

●三七頁ブック欄「『燕京学報』新一期は、曹雪芹『紅樓夢』之文化位置(周汝昌)、……考古学上所見中国境内的糸綢之路(徐蘋芳)を服務論文二〇篇を収録。」

「服務」は、明らかに「含む」のワープロ変換ミス。「ふくむ」と入力すると、まず「服務」と変換されるから、納得できる。とはいっても、この雑誌から依頼された書評原稿を、五月末締切なのに、いいカッコをして、四月上旬に発送してしまったのだ、ワープロで書いたのを。急に不安になってきた。(無事、九六・八月号に掲載され、一安心。)

⑩HBCテレビ「ニュースの森」(一九九六・四・三〇)

●「連休中に海外旅行に出かける人々のシュツゴクのピークは三日ごろになりそうです。」

早めの夕飯をとりながら聞いていたら、女性アナウンサーが「シュツゴク」というので、すぐ後に同じ局でオウム関連の「視聴者の皆様へ」というTBSの報道特別番組が予定されていることもあり、「出獄」と思ってしまった。思つて当然で、出国(シュツゴク)ですよね。

⑪KM氏「庚信集」について(『汲古』二七号、汲古書院、一九九五・六)

●「はじめに」「ついでに」

この言葉自体が誤っていると言うのではないし、論文の内容もなかなか有益なものだ。しかし、「はじめに」と始まっ

たら「おわりに」で結ぶのだし、「さいごに」で終わるのならば、「さいしょに」で始まるのではないか。それに、「さいご」をわざわざ平仮名にしているのも解せない。この筆者には、和語と漢語とを区別するという意識がないのだろうか。このすぐ前にある澤田多喜男氏の論文は、「前言」で始め、「結語」で締めくくっている。これだけでも気分がいい。前述のような例は、探せばまだまだあるらしく、A M氏(氏は⑩にも登場)「劉禹錫の賦について」(「K院大学中国学会報」三八、一九九二・一〇)は、「はじめに」で始まり、「結語」で終わっている。

⑫「篠路西児童会館七周年記念もちつき大会開催」(広報「しのろ」第四一号、篠路地区連合町内会、一九九六・四)

●「去る、一月十九日午後一時より児童会館体育室にて、児童一一〇名が見守る中で、キネの音を響かせてペタンペタン、お母さん達が用意してくれた、おしるこ、おぞうにのサービスに大喜びの楽しい一日でした。」

広報シリーズ第三弾。これは、篠路地区連合町内会から、拓北・あいの里連合町内会が分離した臨時号の記事。主語が行方不明。意味が通るように添削しなさい、という問題ができそう。同じく「篠路地区少女雪像大会」という次の記事も主語がいつのまにか変わり、述語が行方不明。「篠路地区青少年育成委員会では、去る二月二十五日コミュニティセンター横の広場にて開催された大会は、好天に恵まれ、チーム対抗でそれぞれにテーマを決め雪像作りに力を合わせて取

り組み、その出来栄は見事な力作揃い、……又、お母さん方の作ってくれた豚汁を囲み、楽しい一日を過ごしていた。」冒頭のK連合町内会長の「ごあいさつ」の、「豪雪に見舞われました冬も日増しに雪溶けも進み春が身近に感じるこの頃です。」という文章など、原文を生かしつつ添削すると、「豪雪に見舞われました冬の厳しさは峠を越し、日増しに雪溶けが進み、春が見近に感じられるこの頃です。」とでもなるうか。この広報、学校で一所懸命(この言葉も「一生懸命」に変身したようだが)に国語を習っている子供達も読んでいるのだろうか。読んでないよねえ。熱心な読者としては次の号が待ち遠しい。

⑬「河合了の欠陥住宅を斬る」(「たいせつ」五月号、(株)木の城たいせつ、一九九六・四)

●「最近特に多く見かけるのが今回のようなコンクリートブロックの代替えや鉄筋不足である。」

「代替(だいたい)」を口頭で言うと、「大体」「大隊」「大腿」(これはないか!)などと混同されるので、知っていないながら「だいがえ」と言うのだと思っていた。例えば「だいがえ措置」などのように。しかし、「だいたい」と読むことを知らない人が増えたのではないか。最初から「だいがえ」と読むと思っ

ているから、わざわざ「え」などと送り仮名を振ったりする。「辞林21」は、「だいがえ【代替え】↓だいたい(代替)」と、カラ見出しを立てている。これでいいのだろうか。この雑誌は、頼まないのに、時々送られてくる(拙宅は、別の業者に

発注した)。比較的宣伝臭が少なく、ためになる記事もあるし、そのうえ無料だからいいのだが。この号には、「若干二歳の子供」(岡田久典「かんけいない」という言い回しも出てきた。「弱冠」は、本来、二十歳のことだが、転じて若いことも言うらしいから、これと混同したのだろうが、二歳の子を弱冠とは言わないから、やはりおかしい。

⑭池田正志「授業日誌へ一九九一年」(「甲南国語通信」一一号、甲南中学校・高等学校、一九九二・六)

●五月三〇日「高校三年の国語で田辺聖子の『ついふらふらと』を読んでいた時、『腋窩』をうっかり『わきが』とやりかけ、『端麗な面輪』の『面輪』はついに読めなかった。」

これは違和感を感じたということではない。この雑誌は、時々、甲南高校の濱政氏が送ってくれる。小生が、このような雑文を書くことになったのも、この池田氏の文章が頭にあったからかもしれない。連載中の、面白い短文が満載されているエッセー。同じ号からいくつか紹介しよう。

「夢」という漢字を間違う子がいて、その子はいつも「夢」
見ている子で。

サンテレビの女性アナが「神戸まつりのゼンケイキ」と言っていた。前景気のこと。

「猫」の「田」を「由」と書く子が多い。「手へん」が「けものへん」になる子も多い。

NHKのアナがさかんに「農作物」を「ノウサクブツ」とやる。「ノウサクモツ」ではなかったのか。

岩波新書「竹の民族誌」で、「後日譚」に「こうじつたん」のルビあり。

池田氏とは面識はないが、同好の士であることは確かだ。

⑮「全国の天気」(NHKラジオ、九六・五・一三夜、一一時五五分頃から)

●「東北地方のほう」「北日本のほう」「天気のはう」「気温のはう」

女性アナの質問に答えて、気象協会の田代という予報士？が連発していた言葉。「のほう」という耳障りな言葉を聞くことが多くなった。「東北地方のほう」というのは、いったいどっちのほうだと問い詰めたくなる。このごろは、他の予報士も、「北海道東部のほう」などと連発する。気象協会という組織も、夜が遅くなるとベテランの予報士は帰ってしまい、経験不足の若者が担当するからこのようになるのだろうか。天気予報ばかりでなく、言葉の訓練と教育もきちんとしてほしいものだ。

⑯伴野朗『流転の故宮秘宝』(尚文社ジャパン、一九九六・四)

●二六頁「未曾有の大地震により、市の戸籍原本が大量に焼失した。」

本書の帯に「日中戦争、国共内戦とつづく、中国大陸の戦火に追われて、苛酷な運命をたどった故宮博物院の秘宝。」とある。この四月から始まったNHKスペシャル「故宮」の放映に合わせた出版であることは明白。「未曾有」には、わざわざ「みぞう」とルビが振ってある「會」は、「會」の誤り。

そうでなければ、「未だ曾て有らず」とは読めない。この本、ルビに変なものが多く、三〇頁「雷峰夕照」(らいほうゆうしよ)は、「せきしょう」だろうし、四〇頁「臨沂」(りんきん)は、「りんき」の誤り。ああ、汚らしい。八六頁「開封」(かいはう)は、封書などを開くときなら「かいはう」と読み分け合のように北宋の首都を言う場合は「かいほう」と読み分け合。二八一頁「相槌」(あいづち)は、「あいづち」の誤り、九八頁「蘭相如」(りんそうじよ)は、「りんしょうじよ」。「完璧」「刎頸の交わり」で知られる蘭相如も、これではかた無し。「一四四頁」「兵站」(へいたい)は、「へいたん」。こんなことならルビはないほうが却ってすっきりする。送り仮名にもおかしいものがある。一一〇頁「下洞は、狭まくて、細長い。」と、一五七頁「奇岩、奇石がところ狭ましと配されている。」は、いずれも「ま」が不要。一三三頁「逃がれる」は、「が」が不要。二七三頁「敵に回わす」は、「わ」が不要。我が愛読する伴野朗のことゆえ、ついつい購入してしまいが、多作がたたって、筆が荒れたと考えざるを得ない。スケールも小さくなって、一度聞いたような、画一的かつ観光案内的で余計な説明(枚数稼ぎ?)が増えている。残念。

⑰ AM氏「中唐—文学史区分における意味」(科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書「中唐文学の総合的研究」代表者筑波大学 松本肇、一九九六・三)

● 一頁「文学史が……、また文学進展の説明を文学に即して語られる必要もある。」

「語られる」を生かすならば、「説明は」だろうし、「説明を」を生かすならば、「語る」にすべきだろう。初歩的な誤り。この手の研究成果報告書は、締め切りぎりぎりにつけ仕事でまとめられるせいミスプリントが多いが、これに収録されている他の文章はなかなかしつかりしていて、教えられないものがほとんどだから、これも単なるミスとは思えない。同じ頁に「唐代中期の『詞』が宋詞の先駆となり、宋詞から明の散曲への変化などが思い浮かぶ。」というのもある。少なくとも「明の散曲へと変化していったこと」としなければ、文意は通じない。「小説」は、本来歴史を補完するきわめて瑣末な機能としてしか認められなかった。も、「機能を有するものとしてしか」とすべきだろう。三頁「文人の空間移動の広がり、従前の体験にはない様々な面での境界での接触をもたらしした。」などという文章も、「空間移動」「境界での接触」などという、一見流行の言葉を散りばめてはいるが、要するに、中唐では、文人の活動(旅行?)領域が広がった結果、いろいろな経験を文学に取り込んだ、ということなのであって、平易なことをいかににもむずかしげに表現するのは、まったくもって鼻持ちならぬ。こういうのをペダンチック(術学的)というのだ。この文章の次に載る京都大学教授川合康三氏の「中唐以後の二つの文学潮流」という論文が、事実を踏まえた、平易でかつ説得力のあるものになっているのと実に好対照である。編者の松本氏に聞いたらAM氏は、真面目な研究者だそうだが、AM氏は川合氏のような文章を熟読し

て勉強することだネ。

⑱ 浅田次郎『蒼穹の昴』上・下（講談社、一九九六・四）

● 四八頁「すべからく心に基き命に則り、敬を貫き、庶事万民の利を計るを以てす。」

前号の①でも紹介した「べし」抜き例。この本、NHKラジオの深夜放送でも紹介していたし、帯に、「この物語を書くために私は作家になった。」などと殺し文句があったので購入。中国清末を舞台に、科挙の状元様は出てくるは、宦官は出てくるは、西太后、康有為、譚嗣同、果ては毛沢東までもが登場し、不覚にも涙がこぼれるほど感動的な場面もあって、確かにお勧めなのだが、これは頂けない。上巻の四九頁にも、同じ文があるし、六四頁に、「すべからく民の痛みを解し、老いたる者に一碗の茶を分かち与えねばならぬのじゃ。」とあり、一六三頁に、「すべからく天下を治める。」とあり、一七〇頁、一七一頁、二四〇頁にも似たような文があり、三四一頁「すべからく殿に昇りて龍顔を拝するに勝えず。」になると、もう何をか言わんやなのだ。これは下巻も同じで、三〇七頁にもある。一一二頁の「異口同音の声を揃えた。」も、変じゃない？二五二頁の「腐敗随落」、二六二頁の「わられ三人」は、しっかり校正せいと言いたくなる。下巻一六四頁の「芸は身を助くる」は、「助く」だろう。中国音をルビにふったものはいちいち言うのも疲れるくらいおかしいのがあるのだが、一つだけ。主人公の一人である梁文秀の母を「朱妾」というのだが、どうしてこれに「ヂユヌ」と

ルビをふるのか。「ヂユチエ」としてもらいたい。なぜ、専門家に見てもらわないのだろう。再版時には直っているかもしれないが、二セットも要らないしね。

⑲ 土屋英明『性史』、張競生の生涯（『東方』一七四、一九九五・九）

● 三頁「パリでの八年に渡る生活」

「渡る」と「互（互）る」を区別できない、これも多い。前者は、「川、海、橋や道路などを横切つて向こう側へ移動する」（『辞林21』）が原義、後者は「時間、回数、数量がある大きさに達する」（同）。ただし、後者は、常用漢字ではないから普通は平仮名で書くのだ。

⑳ 星野博美『謝謝（シエシエ）！チャイニーズ』（情報センター出版局、一九九六・二）

● 一一〇頁「水泥 水泥」

こんな中国の旅もあったのか、と感動させられる中国旅行見聞記。若い女性の目から見た等身大の中国人が描かれているお薦めの一冊。この部分は、街角で仕事を求める日雇い労働者の前に置かれていた段ボールの切れ端に書かれた中国語を訳したもの。他に「掃灰毯 古いカーペットをはがす」「水道 水道工事」などと訳されている。しかし、「水泥」がそのまま水泥では翻訳にならない。ここはセメント、またはセメント工事としなければ。著者はICUを卒業後、香港にも一年間住んで、広東語と普通（北京）語もできるのだから、単なるミスプリントと思いたい。また二〇一頁「ミニスカ

トを履いた……色白の女の子」は、「穿いた」だろうし、二〇六頁「一人っ子政策の一貫」は、「一環」の誤り。二三三頁「しゃちちよこぼった文章」というのは、見慣れない表現だと思つて『辞林21』の「しゃちほこ(鱧)ぼる」を引いたら、「しゃちちよこぼる」「しゃちこぼる」ともとあつて、こちらが教えられた。二九三頁「自分の姿とだぶつて見える。」は、前号に、どうして「ダブつて」と書かないのかと書いたのだが、もうこれは流通しているということなのだろうか。細かい瑕はあるが、特に中国行きを希望している学生に読んでもらいたい、みずみずしい感性に溢れた良心的な本であることに変わりはない。

②横山宏「佳酒交歓」(「日中友好新聞」九六・六・二五)

一面の随筆「蜀と言えば詩人杜甫と三国志で名高い魏の武帝曹操が浮かんでくるが、その曹操の『なにをもつて怒りをやすめ、憂いを忘れん。唯杜康(酒)あるのみ』の詩(短歌行)で名高い洛陽竜門の酒で、数千年の歴史があり、清冽透明にして柔らかい芳香を放ち、いかにも武骨な感じのする曹操とのコントラストが絶妙である。」

「三国志」ときたから、ああひどい、三国志も知らないのかと、まずがっかり。さらに蜀と言えどどうして曹操が浮かんでくるのか、全く分からない。小生などは杜甫草堂は別として、劉備と諸葛孔明ゆかりの武侯祠、三峡、三蘇、都江堰、麻婆豆腐、榨菜、「蜀犬 日に吠ゆ」という言葉、などなどが浮かぶが、曹操は浮かばない。彼が蜀へ入ったことはない

はずだが、これは個人の連想だからいたしかたない。次の「短歌行」の引用は、どうせ引用するなら、「何を以てか憂いを解かん、唯だ杜康有るのみ」と正確に引用してもらいたい。どこから「怒りをやすめ」などと出てくるのか、理解に苦しむ。さらに、「洛陽竜門の酒」というのは、この「杜康酒」が主語なのだろうが、杜康酒は「洛陽竜門の酒」なのだろうか。横山氏の言っているのは、現代の酒であろう。こんな本を持ち出すまでもないのだが、劉景源・杜福祥主編『中国名酒』(山西教育出版社、一九九四)には杜康酒が河南省汝陽県と同伊川県で造られている、とある。これは小生も土産に購入したことがあるが、かなり度の強い、淡黄色を帯びた蒸留酒であり、しかも、中国で本格的に蒸留酒が造られ始めたのは元代であるというのが定説だから、数千年の歴史がある訳がない。ちなみに、曹操の言う「杜康」とは、伝説の酒造りの名人が造つた美酒という一般名詞なのであつて、特定のブランドを指すものではない。短いエッセーとはいえ正確に書いてもらいたいものだ。横山氏は、北京師範大学客座教授だという。この新聞は、小生の私淑(何回も会つたことがあるのに私淑とは何事かと、高島俊男氏がなにかに書いていたが、小生は一度もお会いしたことはありません。お手紙をいただいたことは何回もあるから、やはり私淑とは言わないのだろうか、分かんなくなつてきた。)している研究者の文章もしばしば載り、かつ普通の新聞には載らない中国の最新の動向(「中国のふつう」という漫画は絶品)も伝えてくれるので購読している

が、このようにミスプリント?のある、なにやら得体の知れない文章が載るのは残念だ。

②② 松本清張「紐」(HBCテレビドラマ、九六・七・一夜)

● 風間杜夫の科白「きしくも……」

風間杜夫の扮する保険調査員が言った言葉。「奇しくも」と書くから、こう読んでしまうのだが、リアルなドラマが台無し。その後、NHKラジオ(九六・一一・四、夕刻)の旅についての座談会を聞いていたら、みなみらんぼー(シンガーソングライターだそうだ)も、「きしくも」と言っていた。何が本職か知らないが、知ったかぶりするな!!

②③ 稲葉三千男訳「陶淵明 飲酒(その六)」(日本定型詩協会「中庭詩集」思潮社、一九九五)

● 二二二頁冒頭「出所進退 千通り どれがいいやら わるいやら」

陶淵明が、刑務所から出てきたのかと目を疑った。原文は「行止千万端、誰知非与是」(行止は千万端、誰か非と是とを知らんや)。松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』上(岩波文庫、一九九〇・一)を参照したのだろうが、こちらはきちんと「人の出処進退は千差万別であって、その是非はだれにも判断できないはずだ。」と訳している。稲葉氏は、「出処」(出所にあらず)が、出て官に就くことと、退いて民間にいること、また、身の振り方、という意味であることを知らなかったのだ。ちなみに、『大漢和』で「出所」を引くと、「出処の②に同じ。」とあって、そちらには「もののでどころ。」

由来。」とある。「受刑者が釈放され、刑務所を出ること。」(『辞林21』)という意味があるのは日本語だけのことらしい。頂いた本にケチをつけてすみません。

②④ 吉川忠夫『三余録―余暇のしたたり―』(中外日報、一九九六・三)

● 一九頁・二七頁「樓宇烈先生」、二七頁「樂寿明先生」

序文に、「本書は、一九八八年の四月以来、『中外日報』の社説欄に寄せた小文のなかから五十一篇を抜いた自選集である。」とある。読書ノート(書評)なども含まれ、特に仏教・道教関係の書籍の紹介は、新たな知見を与えてくれただけでなく、読書の在り方についても考えさせられた(『中外日報』は、仏教関係の新聞社だそうだ)。ただし、ミスプリントがないわけではない。新字の中にここに挙げたような旧字が混じるのはその一例。一一二頁、白居易の詩句の引用、「紅旗破賊征戎は吾が事に非ず」の「征戎」は不要。一二〇頁、「都道府県対抗の女子駅伝競争」は、「競走」の誤り。一四二頁の「裨益を受ける」は、変な表現。「裨益」は、補い役立つの意だから、「裨益する」とすべし。一六〇頁、「中俱村」(「ちゅうは」とルビがある)は、「中垣(壩)村」の誤り(『陝西省地図冊』西安地圖出版社、一九八八で確認した)。陝西省漢中市の一带には○○壩という地名が多い。重箱の隅をついたが、この本には収録しなかったという、「白居易と仏教」「諛墓の文」なども、是非とも読みたいものだ。

②⑤ 「中国文学史」前期試験(九六・七・一九実施)より

●「講議」「とうい」

ウチの学生の恥をさらすようで気がひけるが、漢語文法の試験用紙の末尾に、前期の授業の印象を書いてもらったところ、「講義」を「講議」と書いた者が、約五〇名中六名もいた。ただし、「講議」という語がない訳ではない。「大漢和」は、「ときあかし論ずる」として、『史記』儒林伝、『漢書』武帝紀、『顔氏家訓』勉学篇の用例を引いている。しかし、学生諸君がこれを意識しているとはとうてい思えない。そのほか、「基本講造」「印像」「貸りる」「複習」「不思議」と誤った者、「通り」を「とうり」、「遠い」を「とうい」、「丁度」を「調度」と書いた者もいた。また、印刷しにくいので用例は省くが、ケモノ偏の書き順を知らない者も目立つ。専門の内容に入る前に、高校で習ったはずの事項を復習させる大学が増えているそうだが、本学も安閑としてはいられないことを実感。

②⑥ 組見本 (王伯敏著・遠藤光一『中国絵画史事典』出版案内、雄山閣、九六・七・二四入手)

●「吳宏はあざ名を遠度といい、……」「羅牧は、あざ名を飯牛といい……」「王概はあざ名を安節といい……」

訳者は、「字」一文字で「あざな」と読むことを知らなかったのだらうか。わずか二〇行ほどの組見本に三箇所も出てくるので、単なる誤解とは思えない。だから、この本は買わないことにした。

②⑦ 種村直樹『ユーラシア大陸飲み継ぎ紀行』(徳間書店、一九九六・五)

●九九頁「(プルゼニ駅は) 国際列車専用の部屋があり、中規模駅にしては立派と関心した……」

ポルトガルのポルトから出発して、ヨーロッパを通過、モスクワからカザフスタンのアルマトイを経、中国の酒泉、紹興など、さまざまな名酒の産地を鉄道でめぐるという気宇壮大な旅行。「関心」は、当然「感心」。中国に入ると急にミスプリントと誤認が増えるのは、僻目だらうか。二二七頁に「蘭州の王泉ビール」とあるのは、「五泉ビール」だらう(『中国名酒』で確認した)。二四三頁の「息子を硬座車に載せた」は、子どもが荷物のような。ルビで、「油条」に「ユウヒヤオ」とあるのは、せめて「ヨウテイヤオ」とすべきだが、このようなのは知ったかぶりしてと、笑って許せるが、ちよつと見過ごせないのは二二九頁で、酒泉公園の入場券に印刷されていた李白の「月下独酌」詩中の「地もし酒を愛せずんば、地にまさに酒泉なかるべし」の句を見て、「そうか、李白は、ここまで来ていたのか。」とか、「無類の酒好きだったそうだから、(長安から) 一五〇〇キロほど西に酒ゆかりの酒泉があると聞けば、万難を排して足を向けたに違いない。」などと、李白の酒泉訪問を事実と決めてかかり、その理由も勝手に推測していることだ。こういうことは、きちんと調べて書いてほしい。このほか、中国の簡体字を知らないための誤りもあるが、印刷に困るだらうからやめる。

②⑧ 推進会会長 Y・S「地域社会の役割」(篠路中学校区青少年健全育成推進会「しのろ推進会だより」14、九六・七)

●「見てみぬふりをする・臭いものには蓋をする・他人のことには係わりたくない等々が、古い日本人の習慣というか体質として指摘されております。これを改めない限り『協調性に欠ける地域社会』は閉塞してしまおうでしょう。」

まことに不可思議な文章。三つ挙げられている例が本当に古い日本人の習慣と体質なのかはさておいて、「協調性に欠ける」は、「協調性に富む」の誤りだろう。それでもなんだか変だなあ。この広報誌には、「一カ月で二度も夜の投石によって拓北小のガラスが割られる事件があった。」という記事もある。拓北小は、「計十数万円の損害」だそうだ。このお金で子どもたちの喜ぶ本が何十冊も買ったのに（某校長に小学校の年間の図書費は、数万円だと聞いた）、胸が痛む。

②⑨ 津本陽『天の伽藍』（角川書店、一九九六・七）

●二五四頁「上海からは銭塘江、揚子江を遡り、蘇州、九江を船上から遊覧する。」

津本陽は、江戸を舞台にした歴史小説しか書かないのかと思っていたら、「ヨーロッパ文明に対するアジア文明の顕現に生涯を賭けた（大谷）光瑞の足跡を壮大なスケールで描く！大型歴史小説」（帯の宣伝文句）とあったので読んでみる気になった。かつて敦煌の石窟を見学したとき、大谷探検隊の一員である吉川小一郎が、貴重な壁画に自分の姓名を刻みつけたことが、入口左側の掲示板に蛮行として糾弾されていたことも記憶に新しい。仏教遺蹟探険という美名のもとに行なわれたこのこと（一種の破壊）を津本はどう考えているかに

も関心があった。探険が破壊にも通ずることがあるという観点は津本には全くないらしい。それはともあれ、光瑞の中国訪問の場面になると、怪しい記述がしばしば見られる。上海から長江を遡るのだったら、杭州のあたりで杭州湾に注ぐ銭塘江は通らない。ちなみに上海は長江の支流の呉松江の流域に開けた都市である。これと勘違いしたか。二五七頁の「醴泉の九峻山」もおかしい。よく間違える字だが、唐の太宗李世民の陵墓は、九峻（音はソウ）山にある。ちゃんと辞書を引きなさい。二五八頁「華清宮驪山温泉」には、わざわざ「れいざん」とルビを振っている。楊貴妃の故事で知られるこの温泉は、昔から「りざん」と読み慣わしている。二六三頁の明治天皇の勅語の「朕深く文を嘉す」は、「之を嘉す」だろうね。光瑞が、日露戦争に一門を挙げて協力したのに感謝したものの、産経新聞に連載された小説だそうだが、単行本にするときには、きちんと直しなさい。でも、それをされたら小生のネタがなくなってしまうか。

③⑩ NHKラジオ全国ニュース（九六・九・五、一三時から）

●「エリツイン大統領が心臓の手術」

この「手術」が「しゅずつ」に聞こえる。聞き耳をたてたが、やはり同じだった。青木という女性アナウンサー。以前、民放で、北海道出身のアナウンサーが、鼻濁音の発音を覚えるのと、手術等の発音をきれいにするのに相当な努力をしたと言っていた。このごろのNHKは、発音の訓練をどのくらいしているのだろうか。「しゅじゅつ」は言いにくいから、「し

じつ」と言ってもよいと指導しているという話も聞いたが。時節柄、相当な難関を突破したはずの人材なのに。二四時の同じニュースでは、中年とおぼしき男性アナウンサーが、さりげなく(当然か)正確に発音していて、なんだかほつとした。ところが、九六・一一・一七、朝八時からのNHKラジオ全国ニュースでは、手術後のエリツイン大統領の白黒写真が公開されたのを、「しゅうつ」と言う。長谷川という中年男性アナだったが、この人もしゅじゅつと発音することを放棄しているらしい。

③① 陳舜臣『耶律楚材』上(集英社、一九九四・五)

●一七頁「群小部族が血を血で洗う抗争をくり返している」何回も口の中で繰り返すと分からなくなりそうだが、「血で血を洗う」が正解。どっちでもないではないかと言う向きには、このよく使う言葉には典故があることを指摘しておく。『旧唐書』卷一二七、源休伝の、ウイグル族の可汗(首長)の使者が、源休に向かって言った言葉に、「汝国已殺突董等、吾又殺汝、猶以血洗血、汚益甚爾。」(汝が国 已に突董等を殺す、吾も又た汝を殺さば、猶ほ血を以て血を洗ふがごとし、汚れ益々甚しきのみ。)とある。殺されたら殺し返す、果てしなく報復を繰り返す、と言うのが原義。したがって、決してどちらでもよろしいとはならない。この本は、新本同然なのを北大前の古書店「弘南堂」で一〇月に購入した。上下で三二〇〇円が一五〇〇円。この時に、神田喜一郎『芸林談叢』(宝蔵館、一九八一)も購入した。家で改めたら、札幌の丸

善書店が故石田公道氏(小生の前任教授)に宛てた薄い納品書(昭和五六・一一・一四付け)が挟んであった。まったく捲った形跡のない本を手にして、しばし「蔵書一代」(蔵書は当人が亡くなれば散逸する)という言葉を噛みしめたことだった。

③② 鹿島茂『子供より古書が大事としたい』(青土社、一九九六・四)

●六二頁「五万フランというは高すぎる」

●一五六頁「取るものも取らずに駆けつけた」

この本の帯に、「買うも地獄、買わぬも地獄。洋古書の魅力とコレクション地獄の恐怖」とある、壮絶な古書マニアの戦いの記録だそう。前者は、「というの」の誤植なのは見やすい。後者は、「取るものも取り敢えず」だろう。このままだと食事も摂らずに、なのかと誤解する。それはともあれ、この本の題名は洒落てると思いい、これが購入の一因になったのだが、太宰治『桜桃』の冒頭に、「子供より親が大事、と思いたい。」とあったのだ。「札幌国語研究」創刊号の西原氏論文「『桜桃』と『哀しき父』」を読んでいて気がついた。旭川へ行く特急の中で、今こんな本を読んでいると、見せながら話したのに、氏は教えてくれなかったのだ。意地悪!! しかしながら、結果としての学恩には感謝します。

③③ NHKテレビ BS11「悠久の長江」(九六・一一・二、午後三時ころ)

●「バイリヨウの街が見える」

一月一日から、楽しみにしていた長江からの衛星中継を交えた「悠久の長江」が始まった。初日は金曜日なので、普段はほとんど同僚と飲んでから帰るのだが、この日ばかりは夕刻五時の放送開始に間に合うようにと、大学の廊下で飲み仲間には合わないことを祈りつつ帰宅した。二日は午後の中継を集中して見た。石宝寨など、以前長江下りをした時には上陸して見ることでできなかった内部をじっくりと堪能できるのはうれしいが、搾菜の特産地（日本の瓶詰の搾菜のほとんどはここからの輸入品）でもある涪陵を「バイリヨウ」と繰り返す。倍も培も陪もバイだが、涪の音は、フウカフ。越前屋とかいう、中国語に全く無知な人物が食品市場などを摘み食いしながらうろつき回るのが目障りではあっても、時々面白いので許すが、バイリヨウは許さない。なお、植木久行『唐詩の風土』（研文出版、一九八三）、二八二頁では涪州に「ほうしゅう」とルビを振っている。涪州は、涪陵と同じだが、ホウと読むのは水の泡などの特別な意味の時のみ。これも誤り。また、昭君村を「シヨウクンムラ」と言うのも気になる。NHKは、中国の地名を音訓ませこぜにして読むことがしばしばある。これも、シヨウクンソンと言ってもらいたい。

③4 NHKラジオ 「第二次橋本内閣 大臣就任記者会見」（一九六・一一・七、午後六時ころ）

●「くにないがい」

「国内外」を「コクナイガイ」と読む人が増えて気にかかっていた。経済企画庁長官の某氏にはなんの義理もないが、ク

ニナイガイと言っていたのが新鮮に聞こえた。

③5 寛久美子先生の退官をお祝いする受講生の会「寛久美子を語る」（非売品、九六・一一）

●一四頁「私が学ぶべきと感じた特徴を……まとめてみました。」

本書のサブタイトルに「寛久美子学会の記録」とある。肩の凝らない、ユニークな楽しい本。寛氏とは面識はないが、人物が彷彿としてくる。同僚の中島さんから紹介して頂き、一気に読了した。この例の場合、「学ぶべしと感じた」か、「学ぶべきであると感じた」かにしたほうが良い。「べし」と言うべき所を「べき」と言うことが増えていると、高島俊男氏が書いている（『お言葉ですが……』文芸春秋、九六・一〇）。高島氏は、「はじめてお目に（お耳に？）かかったのは、テレビ朝日ニュースステーションの小宮悦子さんだった。」と言うが、こういう風潮はいつ始まったのだろうか。

③6 出久根達郎『たとえばの楽しみ』（講談社、一九九六・一一）
●八一頁「このころ芝居は日中に行われていたので、目だったのである。」

一瞬、なんのことか分からなかった。「目であったのである。」と読んだのだ。「目立ったのである。」としてくれれば良かったのだ。

●一三四頁「芥川賞に対しての世間の認識の一半が、多少なり読みとれる」

「一半」は、「一斑」の誤りだろうと思って、『辞林21』を

見たら、「いっばん【一半】なかば。また、一部分。」とあった。念のために「一斑」を引くと、「いっばん【一斑】〔豹の皮のひとつのまだらの意から〕一部分。」とある。似たようなものだが、「一斑」のほうには、「なかば」の意味はないようだ。あるいは、一斑を知らない者が一半と言ひ換えたのかとも思つて『大漢和』の「一半」を引くと、「はんぶん」とあつて、『漢書』律曆志、李白「短歌行」の例などがあつて、由緒のある語だと分かる。とんだ誤解をしたわけだ。しかし、漢語としての一半には、一部分の意味はないことも事実だ。一部分、の意で用いる場合には、やはり「一斑」とすべきであろう。一斑の反対語が全豹であると知つて妙にうれしかつたのはいつのことだったか。

●一八六頁「晋水先生の身の上に思いを至したのだろう」

これは、「致した」が正解。

●二二三頁「努力してなお世に入れられなかつた不運の人間」
「世に」といった場合には「容れる」だとばかり思つていた。
『辞林21』には、「いれる【入れる】⑥（「容れる」とも書く）受け入れる。⑨（「淹れる」とも書く）湯を注いで飲み物を作る。」とある。これもお茶は「淹れる」ものだとばかり思つていた筆者の不明だったのか。

●二五三頁「翌年一月の発行『第六号』で、外骨は、『流言飛語に迷わされるな』という当局の注意書きを載せている」
「流言飛語」というエッセーの一節。例の書き替えによつて、「流言蜚語」が、「流言飛語」になつたことは知っているが、

宮武外骨の「第六号」は、大正十三年（一九二四）の発行だから、「流言飛語」なんて言葉は使っていないはず。勝手に直すなど言いたいが、気楽なエッセーだから許すか。

●中下正治「新聞に見る日中関係史—中国の日本人経営紙」
出版案内（研文出版、九六・一一、ダイレクトメール）

●「天津の『国聞報』のように戊戌変法派に組して清国官僚の弾圧下につぶされたり、『重慶日報』のように辛亥革命派に組して中国人主筆を惨殺させたりした例」
与（與）する、は「①あるグループ・勢力の味方になる。

②ある考え方に同意する。」（『辞林21』の意。「組する」は、「与（與）する」と書くのが正しいと思つていて、以前にも取り上げたことがある。この例など、一文中に二箇所も出てくるから珍しいと考えたのだが。『辞林21』は、「くみしやすい【与し易い】とするのに、一方では、「くみする【与する・組する】」としてゐる。これも、どちらでもよろしいということになつていくのか。嘆かわしい。

●稲葉稔『吐蕃の風異聞』（講談社、一九九六・九）

●五二頁「ツァ・ブンツォ」

ゴルムドにある強制労働キャンプの、チベット人看守の名前。小生にはどうしても発音できない。

●五三頁「黒茶けた小道を無数の囚人がうごめいていた。」
「小道に」だろうネ。

●五八頁「それぞれ暗黙のうちに決まつた所定の位置で、……壁にもたれていた。」

「所定」は、定められた、決められただろうから、「決まった」か「所定の」のどちらかは不要。

●二八九頁「期すべくもないとんだ任務を与った」

これは、「任務に与った」だろう。この本、チベットの風俗やチベット人の思考方法を実によく調べているのは感心。ただし、このような間違いは残念。

③⑨「コープファミリー 二月号」(コープさっぽろ、一九九六・一一)

●広告「もどくりになりますか？あなたのおうち……。」

コープさっぽろ福祉共済部の火災共済の一頁広告。「とおり」を「とくり」と書くのは誤り。「もどくり」の「とくり」は、『辞林21』に、「とおり【通り】⑦それと同じ状態・方法であること。」とあるのに該当する。そういえば、会議で該当を「かくとう」という人もいて驚いたことがある。

④⑩ 推進会会長T・K「当会発足二年目を迎えて」(「あいの里 東中学校区 青少年健全育成推進会だより」第三号、九六・一〇)

●「社会における人間関係は、物の豊かさに慣れ・物に対する感謝の気持ちが変われると共に、人に対する思いやりの心が失われているように思います。」

「・」の使い方も変だが、「社会における人間関係」という主語に対応する述語が行方不明だ。「社会における人間関係は変化しています。」とでもして、一旦切れば良いのだ。しかし、この「たより」のおかげで、わが北区の中学生の引き起こす事件はどれも大きく、件数も市内九区で最大だとい

うことを知った。

〔蛇足〕前号の⑩で、某缶入り烏竜茶メーカーのTVコマーシャルで、タレントが茶葉のことを「ちゃば」と言っていると書いた。伊藤園の最近のTVコマーシャルでは、画面の「茶葉」の文字に、「チャヨウ」とルビが振ってある。アサヒ(学生諸君に教えてもらうまでは、てっきりサントリーだと思いでいた)を意識してのことではあるまいが、偉い!!当然か? また、エアホッケーとダーツで評判の、とあるTV番組で、ジャリタレントが、「一緒くた」を「いっしょくたん」と言っていた。だいたい以前の学生のレポートに、「一色単」と書いてあったのをなつかしく思い出す。

〔蛇足の蛇足〕前号に載せた拙文が、「あいの里の風」(創刊号、九六・七。嵐ではなく、風というのがおくゆかしい)という校内コミュニケーション誌の編集担当者の目にとまり、抜粋のうえ転載された結果、某学科では、変な文章を書くことネタにされるぞ、と話題になったという(前号の〔蛇足〕に登場した某教授が教えてくれた)。小生こそ迂闊なことが書けなくなってしまうが、ごく最近の会議でも某教官が「外相」をガイソウと言っていたから、当分ネタに困ることはなさそうだ。この人は、シユソウ、ゾウソウともいうのだろうか。

〔一九九七・三・一稿〕